

『心中天の網島』における罪業と救済

栗原 剛

【要旨】

『心中天の網島』は、近松門左衛門による世話浄瑠璃の集大成とされる。愚かな男（治兵衛）と、それを愛した遊女（小春 および妻（おさん））が、互いに深く通じ合うにもかかわらず、最後は肉体の消息を異にして終わる、というその筋立てと結末を、どう受け止めるべきか。本稿はこの問いを、治兵衛の生における罪の内実と、死後に約束された救済とをつなぐ道のりに焦点をあてながら、考察するものである。

妻、恋人、およびその他の人々に対する治兵衛の罪は、まさに愚かさ自体へと収束するものであったが、それは罪というよりむしろ業として根深く背負われた、彼自身にはどうすることも出来ない愚かさであった。

しかし、そうした罪業をも引き受けて彼を愛してくれたのが、妻であるおさんと、恋人である遊女小春なのであった。二人が「妻」「恋人（遊女）」という立場をこえた深い共鳴を実現していたがゆえに、彼にとってそれぞれの女のかげがえなきは、現世的な肉体、およびそこに宿る心においては、選択も両立もしがたいものとして次第に重く迫り、愚かさ（分別のなさ）という罪業の根深さを、いっそうあらわなものとして彼自身に突きつけた。

その行き着いた先が、おさんとの離縁、小春との心中という結末である。小春との心中は、おさんへの義理立てを願う彼女の導き、および擬似的な出家という回路を経ることによって、死に場所と方法を別々にするものとなったが、彼の孤独な死に姿こそは、小春・おさんという存在がそれぞれにもつ重みと、現世におけるそれらの両立不可能性、ひいては彼自身の背負った罪業を、そのままに結晶させたものであった。

その死は、治兵衛の罪業に対する全き報いであったと言えるが、まさにそのような死にざまを実現し得たことをもって、仏による彼の救済は約束（もしくは要請）された、とも言えるであろう。

『心中天の網島』における罪業と救済

栗原 剛

序

近松門左衛門による世話浄瑠璃、全二十四作中の二十二作目となる『心中天の網島』は、第一作の『曾根崎心中』をその出発点としたとき、到達点にあたる。傑作として、高い評価を受けている。また作品に対する評価の高さが動かないのと同様、本作がもつ魅力の核となるものが、一人の男をはさんだ女主人公二人、すなわち、紙屋治兵衛の恋人である遊女小春、同じ治兵衛の妻であるおさん、それぞれのけなげな自己犠牲と互いの共鳴（女同士の義理）⁽⁴¹¹⁾であることも、ほぼ動かないように思われる。

これに対して、魅力的な二人の女性には生まれ、両者から深く愛された治兵衛には、ありていに言って、見るべきところがない。少なくとも傍から見れば、およそ小春やおさんには釣り合わない愚かな男、それが治兵衛な

のである。

だが、そうした治兵衛をこそ、二人の女は最後まで愛した。また治兵衛にとつても、二人はそれぞれに、かけがえない異性であった。その限りにおいて、三者の内部で取り結ばれる関係は、誰と誰のものとつても、根本的には破綻していない。むしろ、どの結びつきをも深め、強めていく方向で、物語は展開する。

しかしながら、そうした展開の行き着いた先にあったのは、治兵衛とおさんの離縁であり、さらには、治兵衛と小春の心中であった。おさんは一人現世に取り残され、また、死を選んだ治兵衛と小春も、（おさんへの義理立てから）死への方途は「品も所も変へ」⁽⁴⁵⁶⁾た形、すなわち、二人があえて別々に死ぬ形となる。三人は三人ともに、少なくともその身体は、離ればなれとなって終わるのである。

一 問題提起

このような悲劇としての結末を受け止めようとするとき、それを導いたものはまずもって、治兵衛の愚かしさであつた、と糾弾したくもなる。甲斐性のない彼には不似合いなほど出来た妻から深く愛され、二人の幼い子までを成しながら、無分別にも、不幸な遊女との恋に溺れてしまう。このような治兵衛の愚かさを罪だとすれば、物語の悲しい結末は、それに対する報い（あるいは罰）にほかならない、ということになるだろう。小春を刺殺してその骸を丁寧につくろつた後、小川の水門と自分の首とを彼女の帯で結びつけ、念仏とともに流れへ飛び込んだ治兵衛の最期は、

しばし苦しむ。生瓢、風に揺らるゝごとくにて。次第に絶ゆる呼吸の道、息堰き止むる樋の口に。この世の縁は切れ果てたり。(431)

というものであつた。その孤独で不安定な死にざまは、いかにも罪の報いとして与えられたかのような、虚しさを宿している。

しかしながら、ことは治兵衛の愚かさを糾弾し、彼を

突き放すだけではすまない。治兵衛の死を描いた直後、近松はこの物語を、

朝出の漁夫が、網の目に、見つけて、死んだ、ヤレ死んだ。出合へくと声々に、言ひ広めたる物語、すぐに成仏得脱の、誓ひの網島心中と、目ごとに、涙をかけにける。(431)

と結んだからである。治兵衛は孤独な死の先で、「成仏得脱」を約束されている。少なくとも、人々はそれを切に願つた、とされるのである。一体治兵衛は、その死にざま（およびそこへと至る生きざま）に表現された何をもって、罪を清算され、救われるというのであろうか。

また、前述の結末から喚起される問いは、治兵衛一人の罪と救済をめぐるものにとどまらない。愚かな彼を深く愛した果てに、その罪に対する報いの中へ引きずり込まれてしまった、とも見える二人のけなげな女性は、一体どうなるのか。

小春がその死後、救われるべきであろうことは、治兵衛に対する救済に比べれば、受け止めやすい帰結かもしれない。とはいえ、遊女でありながら妻子ある男と本気の恋に落ち、一度は身を切る思いで諦めたその男に殺さ

れ、一人きりの骸を横たえられるに至った小春の生涯とは、総じて何だったのか。治兵衛との心中が、彼女の生の意義を総括する死、したがって、その後の救済を約束されもする死であり得たのは、なぜか。そこまでを問えば、答えはたやすく出てこない。

さらに、『心中天の網島』の結末が喚起する大きな謎は、妻おさんのその後である。治兵衛との離縁を余儀なくされ、現世に一人取り残されてしまったおさんの消息に、近松は一言も触れなかった。自己をどこまでも犠牲にし、治兵衛と小春が生きながらえることのみを願っていた彼女は、二人の死にざまをどのように受け止め、その後の人生をどのように生きたのか。おさんのけなげな献身に魅せられた観客（あるいは読者）なら、当然この問いを胸に抱くはずであるが、作者から直接答えが与えられることはないまま、物語は閉じられる。

以上のように、愚かな男と、それを愛した恋人および妻が、互いに深く通じ合うにもかかわらず、最後は肉体の消息を異にして終わる、という『心中天の網島』の結末は、三人それぞれの生の総体にかかわる問いを喚起する。

こうした問題意識を踏まえ、本稿では、それらの問いを大きく束ねるものとして、物語内部に描かれた、治兵

衛の生における罪の内実と、死後に約束された救済とをつなぐ道りに焦点をあて、これを明らかにしようとする。冒頭にも述べたように、本作がもつ魅力の核は、むしろ小春とおさんの方にあるが、しかし二人の女を突き動かし、互いを深く結びつけましたのは、あくまでも治兵衛への思いなのであった。治兵衛のありようを軸とすることによって、彼女らの生や死がもつ意味の大きさもまた、照らし出されるはずである。

二 治兵衛とおさん

紙屋治兵衛とその妻おさんは、「いとこ同士」(389)であった。治兵衛の亡き父の妹（つまり叔母）が、おさんの母である。すでに近しい親戚でもある治兵衛とおさんが、どのような経緯で夫婦になったのかは、明らかでない。ただ、治兵衛の兄であり、今は粉屋の主人である孫右衛門が、長男らしい思慮分別と情け深さを兼ねそなえた人物であったのと対照的に、治兵衛は、「商売にうとき」(424)者、「分別の、あのいたいけな貝殻に一杯もなき」(424)者、と後に自称して悔いたように、商人としての才覚、成人としてあるべき分別にとぼしい、次男坊であった。紙屋の商売を放擲し、いつそう分別を

無くしたのが、小春狂い以後のことではあつたとしても、
そうなる素質がもととあつたのだとすれば、おさんとの縁談に対しても、それが持ち上がった経緯について、想像をたくましくすることは出来る。それは、危なっかしい次男の将来を案じた父が、すでに他家の人となつた妹（治兵衛の叔母）へ相談の上、あえて自分たちの目が行き届くよう、おさんを娶せようとしたものではなかつたか。

とはいえ、おさんの父五左衛門は「にべもない昔人」(389)、昔気質のいかめしい人物であつたから、その妻である治兵衛の叔母も、また当然彼の父も、治兵衛・おさんの行く末については、縁談成立後も気を揉むところ大であつたはずである。果たして治兵衛の父はその臨終にあたり、妹に対して「治兵衛はお前にとつて：カッコ内栗原）婿なり甥なり、治兵衛がこと頼む」(407)と遺言する。彼女もその一言を忘れず、甥と娘の夫婦生活、(治兵衛の) 兄孫右衛門とともに、気にかけて続けることとなるのである。

さて新妻のおさんというのと、治兵衛の縁者たちの期待にたがわぬ、しっかり者であつた。「見世と内とを一締め、女房おさんの心配り」(403)とは、多かれ少なかれ、結婚当初からのことではなかつただらうか。や

がて長男の勘太郎、その二歳下に長女のお末という、二人の子宝にも恵まれ、彼らの夫婦生活はいかにも順調であるかに思われた。

しかしながら、以上のような周囲の配慮、しかも血でつながつた幼い頃からの縁者たちによる、二重三重の庇護のもとにおかれた治兵衛の内心は、果たして満たされていたかどうか。もちろんそれは恵まれすぎるほどの環境でもあつたが、そうであればあるほど、縁者たちによつてあらかじめ用意され、みずからに覆いかぶされた恩愛の網が、治兵衛にとつては息苦しいものとなつていった可能性がある。同じこととして、そうした環境を最も身近に体験するおさんが、非の打ちどころのない妻として、また子らの母として、みずからを支えてくれればくれるほど、治兵衛の心は、彼女から距離をとることを求めるようになった、とも考えられよう。

三 治兵衛と小春

以上、治兵衛が、大坂曾根崎新地で小春に出会い、彼女との恋に溺れていく前提を、可能なかぎり再構成してみた。小春は彼女自身、「心中よし、いきかたよし、床よし」(389)という魅力的な遊女であつたが、治兵

衛にとつては、そうした魅力と相まって、これまで外からあてがわれてきた家族や親族との結びつき（すなわち夫や父や家の主人としての役割）を離れ、一人の男として主体的に女を求めることの喜びが、小春をかけがえのない存在にしたであろう。

加えて、彼と並行して小春を求める恋敵が登場する。みずから「女房、子なければ、舅なし、親もなし、叔父持たず、身すがらの太兵衛と名を取った男」（389）と豪語する、放蕩無頼の太兵衛である。経済力の有無もあわせて、自分とはどこまでも対照的な境遇にある男と、小春をめぐる争うことは、こちらは逃れがたい現実の制約をふりすててまで恋に向かうのだ、という治兵衛の自負を、必然的に増幅させた。

小春もまた、そのような治兵衛の思いに応じるかたちで、遊女という境遇がもつ制約を超え、一人の女として彼を深く求めることとなる。小春を抱える紀伊国屋が、二人の関係の進展に対する警戒と防御の策を講じていくなか、ついに太兵衛が、金の力にものを言わせて小春を身請けしようと画策するに至って、男女がどこまでも排他的に一つであろうとする思いは、二人を心中の決意へと突き入らせた。

堰かれて逢はれぬ身となり果て、あはれ逢瀬の首尾あらば、それを二人が、最期日と、名残の文の言ひ交し、毎夜／＼の死に覚悟、魂抜けてとぼ／＼うか／＼、身を焦す。（393）

とは、そうした状況下にある治兵衛の姿である。

四 おさんと小春

以上のような経緯で、治兵衛が小春との恋に溺れている間、おさんは「巢守」（409）を余儀なくされた。心中に至るまでの治兵衛・小春の交際期間は「二年」（396）とも、「丸三年も、馴染まいで、」（394）とも言われているが、治兵衛とおさんが最後に枕を並べたのは、心中からちょうど二年前の、同じ月であったとされる。それ以降、「女房の懐には鬼が住むか、蛇が住むか」（409）と後におさんが訴えたように、治兵衛は、彼女の肌に触れることがなくなっていた。丸二年前なら、長男の勘太郎は数えて四歳、長女のお末はまだ二歳である。手のかかる盛りの子育てに追われ、紙屋の商売を夫に代わって切り盛りもしながら、夜は独り寝に堪え続けるほかなかった、まだ若いおさんの辛さは、想像するに余りある。

家を顧みなくなつた治兵衛の恋人が小春であることは、いつかおさんの知るところとなつた。当初は嫉妬もあつたはずであるが、「毎夜くゝの死に覚悟」に「魂抜けてとぼくうかく、身を焦す」(393) 治兵衛の様子を見てとつた彼女は、ついに思いあまつて「あまり悲しさ」(411)、ひそかに小春へ手紙を出す。その文面は、「女は相身互ひごと、切られぬところを思ひ切り、夫の命を頼むくゝ」というものであつた。

この内容は、夫を寝取つて家庭を崩壊の危機に陥れた遊女に対する、「妻」としての口説きではない。すなわち、ただ単に別れてほしい、帰るべき自分のもとへ夫を返してほしい、という要請ではない。そこにあるのは、「女」として、彼の命を思う心のみである。

おさんは、すでに家庭の「妻」として、また「母」として、愛しい「夫」のために最大限の努力をしている。その自分を、にもかかわらず（あるいはそれゆえに）遠ざけ、何よりも「女」である小春を、するがように求めていく「男」としての治兵衛が、しかしおさんにとつては依然として、まるごと愛しいのである。自分には手の届かない、「男」としての治兵衛に恋するおさんは、「妻」や「母」であることを超えて、もはや一人の「女」でもあつた。その限りにおいて、自分は小春と少しも変わら

ない。同じ「男」に恋する「女」として、あなたに頼みたい。それは、あのひとと別れることではない。ひとえにあのひとの命である。「思ひ切」れと言われて「切られぬ」思ひは自分も同様、身が切られるほどにわかつている。その上で、彼の命という一点のためだけに、「思ひ切」つてはもらえないだろうか。

それまで治兵衛との恋を、余人には決して代えられない一対一の仲としか見なかつた小春は、この驚くべき手紙の中に、あえて言えば己れの分身を見た。そのおさんが切に願う通り、まさしく治兵衛を生かすため、と同時に、この言葉をくれた彼女になら、自分に代わつて彼を生をそのまま委ねられる、との思いから、小春は自分の心身を犠牲にする決意を固める。「身にも命にもかへぬ大事の殿なれど、引かれぬ義理合ひ、思ひ切る」(411)と返信した小春はその後、治兵衛と絶縁するための道を模索するのである。

それは、小春自身にとつては死よりも辛いことであつた。治兵衛を遠ざけ彼との心中を回避すれば、自分は否応なく太兵衛に身請けされる。「たとへこなさんと縁切れ、添はれぬ身になつたりとも、太兵衛には請け出されぬ。(中略)物の見事に死んでみしよ」(410)とは、かねてより彼女が治兵衛に誓つてきたところであつた。小

春の覚悟は、治兵衛と別れた上での、孤独な自死の覚悟である。そう「思ひ切り」はするものの、治兵衛に対する「切れぬ」思いは、自死の瞬間をまつことなくおのずから、小春の心身を苛み、瘦せ細らせた（「気色が悪いか、顔も細り、やつれさんした」(386)「灯に、そむけた顔の、あの瘦せたことわい。」(394)）

五 治兵衛の罪業

おさんが小春に手紙を送る、その直前までの治兵衛について、彼の罪はどこにあったか。すでに決意されていた小春との心中も、それ自体大きな罪であろう。とはいえ、二人の意志としてはそれこそが本望であったことに加え、いまだその決行には至っていない。むしろ前節に述べたようなおさんの苦勞と、それを支える自分への愛を、結果として踏みにじり続けたことが、この時点において明白な彼の罪である。それらは、広く親族からあてがわれてきた庇護と恩愛、すなわち彼にとつては自身の本性に従つて主体的に生きること（男として小春を愛すること）を妨げるくびき、その最たるものとしてしか、受け止められなかつた。

しかし本性というなら、彼のそれはむしろ、おさんか

らの愛（ひいては親族からの恩愛）の真に何たるかを分別できない、愚かさといふべきである。この場合の分別は、「夫婦」や「親子」といつた關係を、単に世俗的な役割や規範として、表面的にわきまえる分別であるにとどまらない。治兵衛その人をとりまくそれら（の網）が、みずからの存在の根とやかに深くつながるものであるかを、わきまえる分別である。

とはいえ、そこまでの分別を治兵衛に求めるのは、第二・三節の考察を踏まえれば、酷であつたとも言える。彼の愚かさは、罪というよりむしろ、自分自身によつてはどうしようもない、業であつた。そうである限り、治兵衛はまさに自身の本性に従つて、小春に溺れて行くほかなかつたわけである。

これに対し、小春への手紙によつて改めて示されたおさんの愛は、業としての愚かさをかかえた治兵衛をも、まるごと包みこもうとするものであつた。しかもそれが、他ならぬ小春との間に、深い共鳴を引き起こした。このことによつて治兵衛の業は、業としての底深さを、その後いつそう、あらわにしていくこととなる。

それは結局、表面的には妻と恋人として別種の存在であるおさんと小春、そのどちらか一方を、自分にとつて唯一無二の相手とすることが、治兵衛には許されないと

いうことである。どちらかのみをとれば、他方のかけがえない相手からは、目を背けることになる。小春との心中へと突き進むことが、少なくともお春さんに対して明白な罪だからといって、仮におさんの元へ帰れば、それが今度は、小春の心身を犠牲にすることになる。ではどちらをも棄てずに双方をとれるのかと言えば、それぞれが妻と恋人である以上、少なくとも世俗的な秩序の内部において、かなわない。否、より根本的には、それぞれが代替不可能な心と体をもった二人の女であり、自分も同じ意味の限界をもつ一人の男でしかない以上、どちらに対しても十全に向き合いきるということは、少なくとも現世においてかなわない、ということである。

どう動こうとも、治兵衛は己れの愚かさから逃れることは出来ず、それを乗り越える分別を、手に入れることも出来ない。それが彼の背負った深い業の正体であることとを、手紙のやりとり以後のおさんと小春は、証し立てていくのである。

六 懺悔と離縁

おさんと小春による手紙のやりとりが、治兵衛のあずかり知らないところで行われたものである限り、その時

点において治兵衛の心にあつたのは、いまだ小春との心中のみであると言つてよい。またおさんも、小春からの返信を、御「守」(十二)として肌身離さず懐中するほどに、心から嬉しく受け取つてはいたものの、彼女がすでに自死を覚悟しているとまでは、想像できずにいた。『心中天の網島』は、物語内部の時制としては、この状況を起点として、語り始められる。

「上之巻」では、小春がやつれた心身でけなげにも演じた、嘘の愛想尽かしが、功を奏する。これを鵜呑みにして逆上した治兵衛は、可愛さ余つて憎さ百倍、小春を突き殺そうとする暴挙こそ失敗したが、最後はせめて「今生の思ひ出」(402)にと、彼女の「額際をはつたと蹴て、わつと泣き出し」(402)、そのままおさんの待つ家へと帰っていく。

「中之巻」では、それから十日もたたないある日の夕刻、家に戻りはしたものの小春への未練を断ち切れず、結局そこにあつては所在なげな、治兵衛の様子を描かれる。折しも、太兵衛による小春身請けは間近、との報がもたらされると、治兵衛は、口惜しさ半分、未練半分の涙を流し、〈あなたと添えずに身請けとなれば、その前に死ぬ〉との誓いも嘘だったのだ、「腐り女の四つ足め」(410)と、小春を口汚く罵る。ところが、まさにその言葉から

おさんは、小春がすぐにも自害するであろうことに、はじめて思い至った。彼女は弾かれたように激しく取り乱す。小春との間でやりとりされた手紙の内容は、ここでようやく、治兵衛に対して告白された。小春の命を助けるため、太兵衛よりも先に、今すぐ身請けしてやつてほしいと、おさんは治兵衛に対して懇願するに至る。

「中之巻」の中盤まで、物語内部の時制に沿った進展を思い切つて略述したが、治兵衛の小春に対する思いは、結果として、第三節までに考察したものと変わらないところへ立ち戻つた、と押さえればよい。付け加えておけばそれは、一度は対極の憎しみへと反転した上での回帰であつたがゆえに、いつそう深められたと言つてもよいであろう。

これに対し、治兵衛のおさんに対する思いは、以上の経緯を踏まえた上で、そこから大きく変化することになる。おさんの告白に自身も狼狽しつつ、小春身請けのための手付金さえ自分に出せはしない、となすすべない様子の治兵衛をよそに、おさんは慌ただしく、彼も知らない店の資金と、質に入れて換金すべく、かき集めた、自分や子どもたちの晴れ着とを風呂敷に包み、涙ながらに彼へと託す。これに対しても、治兵衛はただ呆気にとられるばかりであつたが、差しうつむくおさんに対して

ふと、仮に首尾よく身請けがかなつたとして、「(小春については：カッコ内栗原) 困うておくか、内へ入る、にしかける。これに対して彼女は、」

アツアさうぢや、ハテなんとせう、子供の乳母か、飯炊か、隠居なりともしませうと、わつと叫び、伏し沈む (413)

のであつた。今やおさんにとつても、小春は己れの分身であるに等しい。小春の命の尊さを前にして、自身のその後に対する一点の顧慮も、おさんにはなかつた。小春が新たに「妻」となり「母」となつてくれるなら、自分は陰にでも無にでもなればよい、という彼女の言葉に接した治兵衛は

あまりに冥加恐ろしい。この治兵衛には親の罰、天の罰、仏神の罰は当たらずとも、女房の罰一つでも将来はようないはず、許してたもれ (413)

と彼女に手を合わせる。治兵衛ははじめて、己れの罪業の一端を、自覚したのである。これを聞いたおさんもま

た、おそらくは結婚以来はじめて、彼との間の心からの絆を、確認し得たのであった。

しかし、こうしたおさんの自己犠牲も、また治兵衛の懺悔も、小春の身請けと三人の新たな生活（それがどんなにいびつな形であれ）の実現に、つながることはなかった。すでに昔気質の人物と紹介されたおさんの父、五左衛門が、その直後、現場に闖入したせいである。小春を介して夫婦の心の絆がはじめて見出されかけたという、直前までの経緯を知るよしもなく、治兵衛の向かう先が彼女のものである、とだけは見抜いた五左衛門は、あまりにたまつた憤懣を爆発させ、治兵衛におさんとの離縁を迫る。

治兵衛は即座に土下座して、

「ご立腹の段もつともども、（中略）何事も慈悲と思し召し、おさんに添はせてくだされかし、たとえば治兵衛、乞食、非人の身となり、諸人の箸の余りにて身命はつなぐとも、おさんはきつと上に据ゑ、憂い目見せずつらい目させず、添はねばならぬ大恩あり、その訳は月日もたち、私の勤め方、身上持ち直し、お目にかくれば知るゝこと。それまでは目を塞いで、おさんに添はせてください（415）」

と、涙ながらに嘆願する。しかし、これをにべもなくはねつけた五左衛門の怒りは、引きほどかれた風呂敷の中から娘の着物が散らばり出るに至って、むしろその頂点に達した。治兵衛は「逃れがたなき手詰めの段、オ、治兵衛が去り状筆では書かぬ、これご覧ぜ、おさんさらばと、脇差に手をかくる」（416）。おさんはすがりついてこれを止め、決して別れないと泣き叫ぶのだった。だが、もはやどうすることも出来ない。彼女は父に連れ去られていく。これが夫婦の長き別れとなった。

七 心中へ

それが結果的に、五左衛門による妨害のせい、であったかどうかはともかく、その夜、太兵衛による小春の身請けは、治兵衛が彼女のもとへ向かう前に確定してしまふ。去っていったおさんも願ってくれた、治兵衛が小春とともに生きる道は、ついに塞がれてしまった。事ここに至って、治兵衛の心は、小春とおさん、二人の女が等しくかけがえない存在であることの重みを受け止めるとともに、しかしそれを現世の肉体においては引き受けきれないという、己れが深く背負った愚かさとしての罪業

を、決定的に突きつけられたことになる。治兵衛にとつてせめて残された道は、放っておいても自害してしまうであろう、小春との心中死でしかなかった。彼は幼子二人を寢床に残したまま、小春とひそかに逢ひ引きする。

男女の逢瀬のさまを近松は描いていないのであるが、治兵衛に額を蹴られ、棄てられて以来の再会は、小春にとつて、喜びとも、しかし悲しみともなつたであらう。自分の愛想尽かしが嘘であつたと治兵衛に知つてもらへたこと、その治兵衛と二人で死ぬることまでは喜びであつても、手紙の内容を明かしてくれたおさんが、重ねて自分の命を救うためにしてくれた行為を、その後の経緯とともに彼女は知つたはずである。結果として、すでにおさんが犠牲になつたこと、彼女の切なる願いもむなしく二人が今や死なねばならないことは、喜び以上の深い悲しみや罪悪感を、小春にもたらしたと考えられる。ともあれ小春にとつても、もはや心中以外の選択肢は、残されていないのだつた。

紀伊国屋による監視の目、および、おそろくは治兵衛・おさんの離別を知つて深夜の紙屋を訪れた兄孫右衛門による、幼い長男勘太郎をともなつての探索をも悲しくふりきつて、二人は静かに、死出の道行きを歩む。行き着いた最期場は、「南無あみ島の大長寺、藪の外面のいさ

ら川、流れみなぎる樋の上」(426)であつた。

八 所々の死

ところが、いよいよという時になつて、小春は「二人が死に顔並べて」(425)の心中を拒む。「私をこゝで殺して、こなさんどこぞ所を変へ、ついと脇で」(427)と、治兵衛に願うのである。これは、新地から二人歩いてきた道行きの過程で思い至つたことだ、と彼女は言う。少なくとも彼女にとつて、その静かな時間は、手をとりあつて歩む治兵衛とのものでありながら、同時におさんを、深く思い返す時間でもあつたのである。すでに心中するというだけでもおさんに対する裏切りであるのに、ましてや一つところに並んで死にでもすれば、死後「世の人千人、万人より」(427)の非難はともかくとしても、「おさん様一人のさげしみ、恨み妬みもさぞ」(427)と思いやられる。「未来の迷ひはこれ一つ」(427)だ、と小春は訴える。

この申し出を、治兵衛はいったん斥けようとする。いわく

ア、愚痴なことばかり。おさんは舅に取り返され、

暇をやれば他人と他人、離別の女になんの義理、道すがら言ふとほり、今度のく、ずんど今度の先の世までも、女夫と契る。この二人、枕を並べ死ぬるに、誰が譏る、誰が妬む (427)

おさんへの、また五左衛門への懺悔をすっかり忘れたかのような口ぶりは、不可解でもある。しかしまた、これこそが、治兵衛という男なのでもあった。忘却というより、ここに至つてのそれは、むしろ隠蔽であると考える。おさんからの「大恩」(415)とそれを無にした「罰」(416)を思い、「添はせてくだされ」(415)と這いつくばって嘆願し、果てはその場で自害までしようとしたことは、確かに治兵衛にとつての真実であつた。にもかかわらず、同じくかけがえない重さをもつ小春との逢瀬と道行きを経て、死ぬ間際にこうして彼女の顔を目の前に据えれば、おさんへの意識は、どこまでも背後に追いやられてしまふ。もちろん「今度のく、ずんど今度の先の世までも、女夫」という言葉も、小春に対する治兵衛の心の真実を映すのであるが、そこにすがろうとすることは、存在として同じく重いおさんからの逃げであり、また、愚かさという自らの罪業と向き合うことからの、逃げとなる。その重みをすでに突きつけられているからこそ、彼はそ

こから懸命に逃げ、そこに蓋をしようとするのである。しかし小春は、それを治兵衛に許さない。

サアその離別は誰が業。私よりこなさんなほ愚痴な、体があの世へ連れ立つか。所々の死にをして、たとへこの体は、鳶、鳥につゝかれても、二人の魂つきまつはり。地獄へも、極楽へも、連れだつてくださんせ (427)

「今度のく、ずんど今度の先の世までも」連れ立ち、地獄へであろうと極楽へであろうと「つきまつはり」続けるのは、あくまでも二人の「魂」であつて、現世限りのこの肉体ではないはずだ、と小春は訴えかける。身体はバラバラであつてかまわない。死後、どこへどう生まれ変わったとしても、互いの身体はやはり、別々であり続けるのである。しかし、私たちはそこから逃げない。たとえ何世にわたつて別々に生まれ変わり続けても、「魂」として永久に「つきまつはり」続け、いつかは「愚痴」なる「業」から脱け出たい。その誓いを立てるためには、むしろここで「所々の死に」をすべきではないのか。小春はここで、治兵衛に対しては「二人の魂」と述べている。しかし、身体はバラバラであつても「つきまつ

はり」続ける、という魂の数は、小春にとってはおさんを含めて三つでなければならぬ。治兵衛をそこへ引き込むため、まずは互いの、しかしあくまで魂としての誓いを、小春は求めたのである。

治兵衛は果たして、まずは互いの合一を誓う証として、あらかじめ現世の肉体（への執着）を棄てていくことに、進んで同意する（オ、それよく、この体は、地水火風、死ぬれば空に帰る。ご生七生朽ちせぬ、夫婦の魂離れぬしるし、合点（428）。彼は脇差で自分の髪を切り落とし、

これ見や小春、この髪のあるうちは、紙屋治兵衛といふおさんが夫、髪切つたれば出家の身、三界の家を出て、妻子珍宝不随者の法師、おさんといふ女房なければ、おぬしが立つる義理もなし（428）

と述べるのである。この時治兵衛としては、髪を切り落として自らを「法師」に擬すことにより、現世におけるおさんとの縁を、切り捨てたつもりであつたろう。しかしこの行為は同時に、おさんのみならず、小春との間においても、現世における肉体の束縛を脱し、そこに魂としての永続的な「つきまつはり」をこそ、誓うもので

あつた。小春との合一が魂におけるものであることを受け入れた治兵衛は、それによつて必然的に、彼女が願つたおさんへの「義理」立てを、現世限りではない、「義理」（縁）への誓いとして、受け入れるきっかけを得たのである。これを見た小春が「ア、嬉しうござんす」（428）と、惜しげもなく断髪に追隨したのは、治兵衛と魂において合一出来るのみならず、これできつと、おさんの魂とも一緒に「つきまつはり」続けられる、と思えたからに他ならない。

浮き世をのがれし、尼法師、夫婦の義理とは俗の昔、
とてものことに、さつぱりと（中略）捨身の品も所
も変へて、おさんに立て抜く心の道。

ここに言われる「夫婦の義理」とは、直接的には治兵衛・小春の関係を指している。しかしそれが、直前にある治兵衛の言、および直後の「とてものことに、さつぱりと（中略）捨身の品も所も変へて、おさんに立て抜く心の道（魂）の道……カッコ内栗原」という態度決定に挟まれて限る限り、「夫婦の義理」は治兵衛・おさんの関係をも指している、と読まなくてはなるまい。ただ重要なのは、どちらにしてもそれが「俗の昔」とされるのは、

今やその「義理」は消滅した、という意味では決してない、ということである。この表現は、むしろ「義理」が「浮き世」の「俗」を超えて、永続的な「魂」の「つきまちはり」に転じた、という意味を担わなくてはならない。

九 治兵衛の救済

治兵衛が小春の導きによって、おさんの存在を隠蔽することなく、また自身の罪業から目を背けてしまうことなく、そのことの証として「所々の死に」を受け入れるに至ったプロセスを確認した。

受け入れを可能にしたのは、もはや指摘するまでもなく、出家という回路である。ただし確認しておかねばならないのは、彼らにとつて髪を切り落とすという行為は、仏による来世での救済（さらには自身の成仏）を可能にする決定的な転機としての、真性の出家ではなかった、ということである。

彼らの行為はあくまでも、その先にある心中死の決行を、動かぬ前提としている。二人があえて断髪に及んだのは、せめてその死の形を、可能な限り、彼らが互いに深く心身を投じた関わり（おさんを含めた三人の関わり）の総体に即したものにするための、いわば手段、もしくは

は階梯でしかなかった。その限りで、彼らの行為はどこまでも擬似的な出家である。二人は、現世の肉体（への執着）をあらかじめ棄てた気でいたが、彼らにとつて魂の合一を本当に証し立てるものは、あくまでも現世の肉体を、実際に棄ててしまう行為、能動的に自らの命を絶ち切る行為、なのであった。

そうである限り、断髪という行為、およびその先の中行為を支える、自覚的な主体は、己れの罪業を絶対的に見通す分別をもった「仏」ではあり得ない。小春のなどを刺してもらうのは、自らが恋するかけがえない相手としての「治兵衛」でしかなく、その後ただ一人川に飛び込むのも「治兵衛」自身でしかない。それはどこまで行つても、愚かさという深い罪業を背負い、おさんと小春の間で最後まで不安定な心身をもてあまし続けた、「治兵衛」なのであった。

だからこそ、彼は女を殺す（また自ら死する）直前に、せめて「南無阿弥陀仏、弥陀の利剣」（30）、「一連託生、南無阿弥陀仏」（43）と唱えることなしには、その行為に踏み切ることが出来なかつた^五。そうでありつつも、仏に対する救済の願いは、結局、切ない願いでしかあり得ない。二人が息を引き取るまでの時間は残酷に長く、どこまでも陰惨さと迷いに満ちていた。

南無阿弥陀仏、弥陀の利劍と、ぐつと刺され、引き据ゑてものりかへり、七転八倒、こはいかに、切つ先喉の吭をはづれ、死にもやらざる最期の業苦。ともに乱れて、苦しみの、気を取り直し引き寄せて、鏝元まで刺し通したる一刀、ゑぐる苦しき暁の、見果てぬ夢と消え果てたり。(430-431)

樋の上より、一連託生、南無阿弥陀仏と、踏みはづし、しばし苦しむ、生瓢、風に揺らるゝごとくにて、次第に耐ゆる呼吸の道、息堰き止むる樋の口に、この世の縁は切れ果てたり。(431)

治兵衛の脇差は小春の急所をはずし、長い「業苦」を両者に強いる。また、同じく長い時間のなかで、不安定に虚しく揺れつづける治兵衛自身の体の消息は、彼の生きざまそのものである。それは言うまでもなく、おさんと小春との間を、揺れつづけるものであった。さらには彼にとつてのおさんという存在が、まだ幼かった子どもたち、兄孫右衛門、おさんの母でもあった叔母など、現世において治兵衛をとりまいた恩愛の網の総体を象徴するものだとすれば、死にゆく彼は、世俗の恩愛とそれを突

き抜けようとする恋の間、現世(に遺した人々)と来世(で待つであろう小春)の間を、揺れつづけるのもであったように思われる。

そこにある苦しみや迷いは、両極にあるものの間の矛盾が、彼らの死一つ(あるいは二つ)によつて解消し尽くされるものでは決してないことを、証し立てている。近松がかつて描いた『曾根崎心中』におけるお初・徳兵衛の死は、同じく陰惨でもありながら、男女が身を委ね合うある種の官能や陶醉において、一直線に救済と結びつけられていた。そうした絶頂や激しい燃え尽きは、ここに許されていないのである。

とくに治兵衛について言えば、その死にざまは確かに、彼の罪業に対応する報いであり、罰である、とするにふさわしいものであった。しかしそれと同時に彼は、おさん・小春との関わりによつて、すなわち、互いが互いの分身ともいうべき二人の女からの愛(というよりむしろ慈悲であろう)によつて、両者の重みを等しく背負つて宙ぶらりんな死にざまを、しかも最後はどちらに寄りずがるでもなく、愚かにして罪業深き己れひとりの責めにおいて、悲しく結晶させた。それも結局はどこまでも無自覚な達成であるほかなかつたが、その中でせめて阿弥陀仏に救済を願つた、彼の魂のあわれさを、やはり仏は

汲んでくださるはずだ。「すぐに成仏得脱の、誓いの網島心中と、目ごと」に、涙をかけにける」(43)との結びは、決してとつてつけた定型としてあるのではない。それは、小春・治兵衛の骸を目にした人々の願いに託して、近松自身が本作にこめた願いを、観客(読者)に向けて表明したものであったと考える。

結

愚かな男と、それを愛した恋人および妻が、互いに深く通じ合うにもかかわらず、最後は肉体の消息を異にして終わる、という『心中天の網島』の筋立てと結末を、どう受け止めるべきか。この問いを、治兵衛の生における罪の内実と、死後に約束された救済とをつなぐ道の方に焦点をあてながら、考察してきた。全体の行論を大きく振り返ることで、まずは結語に代えたい。

おさん・小春、およびその他の人々に対する治兵衛の罪は、まさに愚かさ自体へと収束するものであったが、それは罪というよりむしろ業として根深く背負われた、彼自身にはどうすることも出来ない愚かさであった。そうした罪業をも引き受けて彼を愛してくれたのが、妻であるおさんと、恋人である小春である。二人がまさに「妻」

「恋人」という立場をこえた深い共鳴を実現していたがゆえに、彼にとつてそれぞれの女のかけがえなさは、現世的な肉体、およびそこに宿る心においては、選択も両立もしがたいものとして次第に重く迫り、愚かさ(分別のなさ)という罪業の根深さを、いつそうあらわなものとして彼自身に突きつけた。その行き着いた先が、おさんとの離縁、小春との心中という結末である。小春との心中は、おさんへの義理立てを願う彼女の導き、および擬似的な出家という回路を経ることによって、それぞれが死ぬ場所と方法を(さらには時間をも)別々にするものとなったが、その孤独な死に姿もまた、小春・おさんという存在が彼にとつてそれぞれにもつ重みと、現世におけるそれらの両立不可能性、ひいては彼自身の背負った罪業を、そのままに結晶させるものであった。その死は、罪業に対する全き報いであるとも言えるが、まさにそのような死にざまを実現し得たことをもって、仏による彼の救済は約束された(もしくはは要請された)、とも言えるのであろう。

* * *

本稿の序において、本作の魅力の核は、愚かで無分別

な治兵衛ではなく、女主人公二人のけなげさと互いの共鳴にあると述べ、第一節の問題提起においては、『心中天の網島』の結末は、彼女らにおける生の総体、あるいはその死の意味としても、問われなくてはならないと述べた。その問いに対する答えも、二人が愛した治兵衛のありようを軸とすることによってこそ、照らし出されるはずではないか、という目論見があったわけであるが、稿を閉じるにあたり、当の問題をめぐっても、現時点で見えている限りの着想を、提示しておきたい。

治兵衛という男を、彼の背負った罪業ごと包みこんで愛するともに、彼自身をその罪業とより深く向き合わせ、救済および成仏への道のりを常に先導していく役割を果たしたのが、二人の女主人公である。この解釈を踏まえれば、おさんと小春には、菩薩のイメージが重ねられていると言わざるを得ない。もちろん、最期場での治兵衛・小春の断髪があくまでも擬似的な出家であったように、現時点で言えることは、治兵衛と小春（およびより強くおさん）との関係性の延長線上に、凡夫と菩薩の関係性がイメージされる、ということにとどまるのであるが、しかしこれが、近松世話浄瑠璃、ひいては広く近世庶民の思想における、仏教のあり方、という大きな問題につながる事柄であることは確かであろう。

最後に、現世に一人取り残されてしまったおさんの消息についてである。自己をどこまでも犠牲にし、治兵衛と小春が生きながらえることのみを願っていた彼女は、二人の死にざまをどのように受け止め、その後の人生をどのように生きたのか。

広く人々が「目ごと」に涙をかけ（431）たというのであるから、まして小春の分身とも言えるおさんなら、二人の死にざまの意味を深く看取したであろうし、二人の成仏を心から願ったはずだ、そうでなければ二人の（ひいては三人の）「成仏得脱」（432）もおぼつかない、との推測は、作品を踏まえた観客（読者）の願いとして、ごく自然であろう。ただ、やはり近松自身がそこに触れていない以上、少なくとも確かな事実としては、おさんのその後については語るべきでない、もしくは語る事が出来ない、とするほかないとも言える。

さらに、近松自身もそこにはあえて触れなかったのだとすれば、『心中天の網島』という作品世界がそれとして完結するために、治兵衛・小春に対するおさんの意識はともかく（あるいはそれも込みで）、おさん自身がその後どのように生きたかという要素は、もはや無くてよいと考えるべきなのかもしれない。なぜ無くてよいのかという問いに対する確かな答えを、現時点では持ち合わせ

せない。ただわずかに本稿の解釈を踏まえて言えることは、その後のおさんがどのような曲折を経るのであるうとも、「今度のく、ずんど今度の先の世までも」(427)、「三人の魂は必ず「つきまつは」(427)って「成仏得脱」に向かうはずだ、ということである。

一 享保五年(1720)十二月六日、竹本座初演。荻田敏夫『近松世話物の世界』真珠書院、2009ほか参照。

二 いわゆる世話物(心中物)の出発点として『曾根崎心中』を、到達点として『心中天の網島』を位置つけた上で、両者をつなぐ過渡期の作品として『心中重井筒』をとりあげ、近松作品における「心中」の倫理的意義を論じたことがある。『曾根崎心中』における男女一体的な心中と、『重井筒』『天の網島』に共通する乖離的な心中とを貫くもの、および前者から後者への展開が何を意味するのか、論者の大きな問題関心である。拙稿「近松門左衛門における「心中」の倫理的意義―「心中重井筒」を手がかりに」(『思想史研究』第11号、日本思想史・思想論研究会、2010)参照。

三 以下、『心中天の網島』からの引用は全て、『近松門左衛門集②』(新編日本古典文学全集75)小学館、1998に

よる。カッコ内の数字は頁数をあらわす。なお、曲節にかかわる諸記号については全て省略したのに加え、改行をなくした箇所もある。

四 廣末保は、治兵衛のこの縊死体について、「突き放しているといつては言いすぎだが、このイメージに死の謳歌はない。精一杯に葛藤を生きたとしても、所詮はむなししい空回りに終るほかなく、(中略)風に揺れるなり瓢には、どんな意味でもすでに情死のぬくもりはない。情死の情緒とは異質な虚ろさが、いつまでも焼きつき残る」(廣末保『心中天の網島』(廣末保著作集第九卷)影書房、2000、pp.172-173)と述べる。『曾根崎心中』の最期場のような「情死の情緒」とは異質の「虚ろさ」があることについて異論はないが、生前の治兵衛が「精一杯に葛藤を生きた」ことと、死体の「虚ろさ」との関係は、いまだ明らかでないように思われる。

五 この念仏は、最期場の近くにある浄土宗大長寺から聞こえてくるものに、重ねられている。『心中天の網島』は上之巻から、「十夜法要」が営まれる特別な期間に重ねられており、小山一成はその設定が、作品における治兵衛・小春の救済と強く結びついていると説く。小山一成『心中天の網島』と十夜法要」(『近松浄瑠璃の研究』双文社出版、2000所収)参照。